

第1編 三次市の概要

1 地 理

三次市は、広島県北部の中国地方の中心に位置し、山陽側の広島・呉・三原・尾道・福山、山陰側の浜田・江津・大田・出雲・松江・米子などの各都市へ約50～80kmの位置にあります。交通網は、中国縦貫自動車道三次ICをはじめ、一般国道54号他4路線、県道45路線及びJR芸備線、福塩線、三江線が市内で交差し、急ピッチで整備が進む中国横断自動車道尾道松江線も含め三次市を中心としてWeb状に広がる交通網を形成しています。



2 自 然

三次市の総面積は778.19 km²で、広島県の総面積の9.2%を占めています。中国山地の南麓に位置し、中央部の市街地は大きな盆地を形成しています。

河川は、芸北の山々に源を発する江の川と、比婆・道後からの西城川、世羅台地からの馬洗川が市の中央部で「巴状」に合流し、下流では高野町からの神野瀬川を加え、「中国太郎」と別名を持つ中国地方最大の河川「江の川」として、中国山地を横断し日本海へ注いでいます。

気候については、北部は、日本海側の影響を受けるため冷涼多雨で、時に冬期の積雪が1mに達することもあります。中心部から南部にかけては、概して温暖な気候といえます。

また、広島県北の水が全て集まるため秋から春にかけては川霧が発生し、それが盆地内に滞留することによって、山頂が島々に見えるいわゆる「霧の海」が現れます。

3 歴 史

三次市は豊富な川の水を利用した水稲耕作と、中国山地から産出する山砂鉄による「たたら製鉄」、加えて山陰と山陽を結ぶ交通の要衝という環境の中で、古くから栄えてきました。この地域に人々が住みついていた証拠となる最も古い石器は西酒屋町の下本谷遺跡で見つっていますが、2万年以上前のもので、時代は氷河期に当たり、まだ大陸と陸続きだった頃です。

四拾貫町と向江田町にかかる陣山遺跡には墓の四隅が突出した特徴のある弥生時代の墳丘墓が発見されています。同様の墳丘墓が島根県、鳥取県、福井県などにも分布していますが、陣山遺跡が時期的に最も古いことがわかっており、三次盆地から発生したという説もあります。

飛鳥時代の7世紀後半には備後国が成立していたことがわかっていますが、現在の三次市の地域が含まれる三次郡、三谿郡及び甲奴郡は大宝元年（701年）の大宝律令によって完成したといわれており、三次郡の郡役所の場所は下本谷遺跡であったことがわかっています。甲奴町地域は初期には芦田郡に属していましたがのちに甲奴郡として独立しています。

平安時代が終わり鎌倉時代に入ると、源氏の御家人が地頭として任命され、何代にもわたってこの地を治め、在地領主となりましたが、戦国時代に、尼子氏からやがて毛利氏の支配下に入りました。

江戸時代には備後国は福島正則の領国となりますが、その後広島浅野藩に属しました。甲奴町の一部地域は福山藩領に属したのち天領となり、その後豊後中津藩の飛び地となりました。なお、三次町、十日市町などを含む市の北西部から南部の地域であった三次郡は旧比婆郡の一部とともに三次浅野藩が5代にわたって治めましたが、同藩断絶後は本藩の広島藩に属しました。

江戸時代の三次地方は、特産物として和紙、砂鉄と木炭を原料にした製鉄が盛んで、中期からは牛馬の普及も進み、交通の便のよい三次の牛馬市は活気にあふれていました。

明治22年（1889年）の町村制施行により、三次市域100余の町村が30余の町村に再編されました。三次郡は明治31年（1898年）に三谿郡と合併して双三郡となりましたが、昭和29年（1954年）に町村合併促進法に基づいて、三次盆地の中心部が三次市となって分離しました。

甲奴町は上下町、総領町を合わせて甲奴郡のまま推移しました。

以後、昭和36年（1961年）まで更に合併・編入を重ねて、平成16年（2004年）4月1日には三次市、作木村、布野村、君田村、吉舎町、三良坂町、三和町及び甲奴町の8市町村が合併し現在に至っています。

4 人口と世帯数

平成17年の国勢調査によると、総人口は59,314人で、平成12年の国勢調査に比べて3.8%減少しており、昭和60年以降少しずつ減少しています。

世帯数は平成17年の国勢調査では、21,968世帯となっており、わずかに増加傾向にあるものの、一世帯当たりの人員は、昭和55年が平均3.3人であったのに比べ、平成17年は2.7人に減少し、高齢化率の上昇と併せ高齢者のひとり暮らしや高齢者のみの世帯が増えている状況を伺わせます。